



TITLE:

<研究論文>養育者の信念からみる 子どもの発達:理論的概観

AUTHOR(S):

本島, 優子

CITATION:

本島, 優子. <研究論文>養育者の信念からみる子どもの発達:理論的概観. 教育方法の探究 2005, 8: 84-93

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190303>

RIGHT:

養育者の信念からみる子どもの発達：理論的概観

本 島 優 子

1. はじめに

親が子どもに対して抱いている見方や考えは、発達心理学で長年多くの関心を集めてきたテーマである。1980年代頃より盛んに行われてきた親の信念 (parental beliefs) 研究もそうした流れの一つに位置づけられる。

親の信念研究は、研究者によって実にさまざまなアプローチ・観点から行われているが、Miller (1988) によれば、この領域における主な関心点は、①親の信念の内容②親の信念の規定因③親の信念と行動との関連④親の信念と子どもの帰結との関連、という4つの問題に収斂されるという。そして、親の信念研究における最も大きな関心点は、親の信念それ自体というよりは、親の信念による子どもの発達への影響を検証することにあるといわれている (Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2002)。

そこで、本稿では、Miller (1988) が挙げた4つ目の問題である、親の信念と子どもの発達への帰結 (child outcomes) との関連性について、とくに焦点を当てて考察を行う。これまでに、親は、子どもに対して、その性質や能力、発達のあり方、育児やしつけなどに関して、実に多様で明確な信念を抱いていることが明らかにされてきた (Hirsjarvi & Perala-Littunen, 2001; McGillicuddy-DeLisi & Sigel, 1995; Miller, 1988; Murphey, 1992; Okagaki & Divercha, 1993; Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2002)。このように親が日常的に抱いている考えや信念が、実際に子どもの発達の帰結にとってどのような意味を持ち、そしてどのような役割を果たすのだろうか。

この問いに対して、本稿では、親の信念の子どもへの影響のモデル化を試みた Murphey (1992)

のレビュー論文を踏まえながら、さらに90年代後半以降から現在に至るまでの最新の研究動向と実証研究の知見も交えたうえで、親の信念が子どもに及ぼす影響について改めて検討したい。そして、親の信念が子どもの発達に影響することについての理論的説明をいくつか挙げ、最後にこの領域における課題と展望について議論したい。

2. 親の信念と子どもの帰結 (child outcomes) との関連

親の信念研究の多くは、親の信念が結果的に子どもにどのような帰結をもたらすのか、親の信念と子どもの行動特徴や心理的特質との関連性を明らかにすることを最終的な目的としている。そして、これまでに、子どもの帰結として、学力や知的発達、社会的発達、自己知覚、ヘルス行動などが取り上げられてきた。以下、各々について詳しく説明していく。

(1) 子どもの学業・認知発達

親の信念と子どもの学力や認知能力との関連性について調べた研究は非常に数多い。というより、親の信念研究は、そのほとんどが子どもの学力や知的発達の観点から行われていると言っても過言ではない。これらの研究は80年代当初から活発に行われてきたが、少しずつ新しい研究の動きや変化も生じてきている。

① 80年代～

この時期の代表的な研究として McGillicuddy-DeLisi (1985) の研究が挙げられる。彼女は、インタビューのなかで、幼児の父母に、子どもが知識をどのように獲得していくと思うか (例えば、

「どのようにして4歳の子どもは他者にも感情や考えがあることを知るようになるか？」など)について回答を求め、父母の反応を「経験」、「認知的再体制」、「直接教示」、「観察」などに分類した。一方、同時期に、子どもには7つの認知課題(記憶課題、保存課題、分類課題など)を与えた。結果、父親母親ともに、子ども自身が能動的に知識を構成していくという親の構成主義的な信念が子どもの全体的な認知レベルと有意な正の相関関係にあった。さらに、親の信念から子どもの認知成績への有意なパスも認められ、親の構成主義的な信念が子どもの認知レベルの高さに影響することが明らかにされた。

子どもの発達に及ぼす多様なリスク要因の影響を検証した Sameroff, Seifer, Barocas, Zax, & Greenspan (1987) の縦断的研究プログラムでは、母親の信念がリスク要因の一つとして取り上げられている。この研究では、子どもが生後48ヶ月時に「The Concepts of Development Questionnaire」を通して、子どもの発達についての母親の信念が測定された(例えば、「子どもの問題はたった一つの原因に基づくものではない」などの項目に対して、「賛成-反対」の4件法で回答を求めた(Sameroff & Feil, 1985))。そして、子どもが4歳になったときに、子どもの言語性IQが測定された。結果、親の信念・態度・価値の下位尺度からなる「親のパースペクティブ」は、子どもの言語性IQの分散の25%を説明しており、社会経済的要因(SES)に次いで説明力が大きかったことが示された。

我が子の知的能力に対する親の認知と子どもの知的能力との関連性について調べた一連の研究がある。例えば、Miller (1986) の研究では、自分の子どもがどれくらいピアジェ課題やIQテストを達成することができると思うか、小学1年生の母親に予測を求めた。そして、同時期に、子どもにピアジェ課題とIQテストを行った。その結果、母親の予想の正確さと子どものピアジェ課題やIQテストの成績との間に有意な相関関係が認められ、自分の子どもの成績を正確に予想する母親

の子どもは、ピアジェ課題やIQテストの成績が良かったことが示された。反対に、自分の子どもの成績を過大評価もしくは過小評価している母親の子どもは、成績が悪かったことが示された。同様の知見は Hunt & Paraskevopoulos (1980) や Delgado-Hachey (1984) の研究においても(Miller, 1988)、また父親を対象とした場合においても認められた(Miller, Manahal, & Mee, 1991)。

以上のように、この時期の研究の特徴として、多くの研究が親の信念と子どもの帰結を同時期に測定し、また相関係数による分析手法を用いて両者の関連性を調べていたことがあげられる。そのため、結論として親の信念と子どもの学力や知的能力との関連性が示されてはいても、因果関係の方向性までは明確にできないという問題点があった。

② 90年代～

90年代半ば以降になると、親の信念と子どもの学力や認知能力との関連性を縦断的に研究する動きが高まってきた。先にも述べたように、それまでは親の信念と子どもの帰結を横断的に測定する研究がほとんどであり、親の信念が子どもの帰結に影響しているのか、子どもの現在の能力が親の信念に影響しているのか明白にできないという問題点があった。そこで、より厳密に因果の方向性を明確にするためにも縦断的手法を用いて研究する必要性が高まってきた。

そうした流れの一つとして、親の信念と子どもの課題行動や算数成績との発達のダイナミクスを調べた Aunola, Nurmi, Lerkkanen, & Rasku-Puttonen (2003) による縦断研究が挙げられる。彼らは、まず10月に、子どもの父母に我が子の算数能力についての信念(「あなたの子どもは算数がどれくらい良くできると思いますか?」など)と我が子の一般的な学業についての信念(「一般的に、あなたの子どもはどれくらい学校の成績がよいと思いますか?」など)を測定した。そして、以後10月、12月、1月、4月それぞれの時期に子どもの算数テストと教師評定による教室行動(課

題焦点行動と課題回避行動)の測定を行った。さらに、学年末に子どもの算数能力と一般的な学業についての父母の信念が、再び測定された。共分散構造分析の結果、父母共に、我が子の一般的な学業についての親の信念が後の子どもの課題焦点行動に影響し、ひいてはそれが後の子どもの算数成績に影響することが明らかにされた。一方、我が子の算数能力についての親の信念は、子どもの算数成績に直接的に影響し、ひいてはそれが後の算数能力についての親の信念に影響していた。また、子どもの課題焦点行動は、後の一般的な学業についての親の信念に影響していたことが明らかにされた。

さらに、子どもの読み能力を対象とした際も、上記と同じような結果が認められ、親の信念が子どもの読み能力に及ぼす影響が示されている(Aunola, Nurmi, Nimi, Lerkkanen, & Rasku-Puttonen, 2002)。

また、Halle, Kurtz-Costes, & Mahoney (1997)の縦断研究では、アフリカ系アメリカ人の低所得層の家族を対象に、学業に関する親の信念や行動が子どもの学業や自己知覚へ及ぼす影響について調べられた。初めに、小学3・4年生の養育者(ほぼ母親)の学業に関する信念(子どもの学歴への期待や知的発達についての信念、子どもの読みや算数の成績の知覚)が調べられた。そして、9ヵ月後に子どもの算数テストと読みテストが測定された。結果、子どもの学歴への期待や子どもの学力の知覚が、9ヵ月後の子どもの算数テストや読みテストいずれとも有意に正相関していた。すなわち、自分の子どもの成績は平均以上であるという信念や自分の子どもは大学まで進学するだろうという期待を抱いている親の子どもは、テストの成績が良かったことが示された。そして、このような親の信念は、親の行動や子どもの自己知覚よりも、子どもの学業テストを強く予測していたことも明らかにされた。

他にも、子どもの言語・読み・口語スキルやコミュニケーション能力と親の信念との関連を調べた縦断研究がある(Sonnenschein, Baker, Sper-

pell, Scher, Truitt & Kitamura, 1997)。就学前児の親に子どもが読書を学ぶのに最も役立つと思われる方法について尋ねたところ、楽しいエンターテインメント活動として読みを与えるべきだと考えている親の子どもは、読書は教えて練習させる必要のある一つのスキルであると考えている親の子どもよりも、後の子どものリテラシーテストの成績が良かったことが明らかにされた(Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2002より引用)。

このように、90年代半ば以降から、親の信念と子どもの帰結との関連性を縦断的手法を用いて調べる研究が増えてきた。親の信念研究の領域では、親の信念と子どもの帰結を同時期に測定する傾向も一方では根強いが、次第に縦断的手法を用いた研究が主流となりつつある。さらに、親→子という一方向的な因果関係のみならず、子→親の影響の可能性についても考慮されるようになり、実際に子ども側の要因(子どもの能力や発達レベルなど)が親の信念に与える影響について検証した研究(Aunola, et. al., 2002; Aunola, et. al., 2003)も行われるようになってきた。

③ まとめ

これまで数多くの研究により、親の信念と子どもの学力や知的発達との関連性が認められてきた。とくに90年代後半以降は、縦断的手法により親の信念が子どもの学力や知的能力に及ぼす影響がより明確となってきた。しかしながら、この領域の研究はそのほとんどが幼児期や児童期に、そして学力のなかでもとくに算数や言語の分野に焦点が当てられている。そのため、親の信念と子どもの学力や知的能力との関連性は、特定の年齢層と特定の学業分野に限って認められる可能性が考えられる。

(2) 子どもの社会的発達

子どもの社会的発達との関連から親の信念を調べた研究は、子どもの学力や知的発達の場合と比べて、極端に少ない。先駆的な研究としては、Rubin, Mills, & Rose-Krasnor (1989)の研究が

あげられる。この研究では、社会的スキルを重要であると考えている母親の子どもは実際に社会的スキルが優れており、さらに子どもの社会的発達への外的な帰属（親の努力など）をしている母親の子どもは、内的な帰属（子どもの気質など）をしている母親の子どもよりも、社会的スキルが優れていたことが明らかにされたという（Murphy, 1992より引用）。

また、Stoiber & Houghton (1993) は、青年母親の知識・期待・信念と子どものコーピング行動との関連を調べている。4～22ヶ月児の青年母親に、子どもの発達の知識や育児へのポジティブな期待、親や子どもの役割の信念について、質問紙で回答を求めた。そして、同時期に、子どもの母子相互作用場面でのコーピング行動（感覚運動の体制化・応答行動・自己主導行動）を観察評価した。結果、親の期待は子どもの感覚運動行動や応答行動を説明しており（各々15%、10%）、よりポジティブで現実的な期待を抱いている青年母親の子どもは、より適応的で効果的な感覚運動行動や応答行動を示していた。さらに、青年母親の期待と信念との交互作用が子どもの自己主導的コーピング行動を説明しており（10%）、子どもについての知識は高いが非柔軟的で権威主義的な信念を抱いている母親の子どもは、自己主導行動が低かったことが明らかにされた。

また、注意欠陥多動性障害（ADHD）の子どもを対象とした研究（Hinshaw, Zupan, Simmel, Nigg, & Melnick, 1997）では、子どものソシオメトリック・テストの予測因の一つとして、育児スタイルについての母親の信念が取り上げられている。9～10歳のADHD児の母親と健常児の母親に、育児のあり方に関する「authoritarian（権威主義的）信念」や「authoritative（子どもの愛情に基づいた統制タイプ）信念」や「寛容的信念」を測定し、同時期に、ADHD児と健常児に好きな友達と嫌いな友達を答えさせるソシオメトリック・テストを行った。結果、親の「authoritative信念」は子どもの集団内でのポジティブな地位や友達からの人気と正相関しており、子

もの集団内でのネガティブな地位とは負相関していた。すなわち、適切な期待や寛容性、自立の尊重、育児の喜びなどを抱いている親の子どもは、友達からの人気が高かったことが示された。また、健常児グループよりもADHD児グループにおいて、親の育児スタイルの信念が子どものネガティブな地位をより強く予測していたことが明らかにされた。

McGillicuddy-DeLisi (1992) の研究では、学校の教室での子どもの社会的行動が調べられている。小学1～6年生の父母に、子どもの社会的発達とそのメカニズムに関する信念を測定し、同時期に、教師評定による子どもの教室での社会的行動（外向性・内向性・創造性・自律性・依存・敵意など）を測定した。母親の場合、発達のメカニズムとして子どものオペラント学習やジェンダー差を重視する信念は、子どもの創造性と負に相関していた。父親の場合、オペラント学習を重視する信念は、子どもの落ち着きのなさとは正相関、課題志向性とは負相関であった。また、ジェンダー差を重視する父親の信念は、子どもの落ち着きのなさや敵意と正相関、自律性や課題志向性や思慮とは負相関であった。全般的に、子どもの社会的発達は男女で異なるという見方や子どもの社会的発達は罰や報酬を通して促されるという親の信念は、子どもの望ましい社会的行動とネガティブに関係していることが示された。

このように、子どもの社会的発達の領域においても、研究の数はそれほど多くはないが、親の信念と子どもの社会的行動や社会的スキルとの関連性が認められている。とはいえ、そのほとんどが横断的・相関的手法を用いて行われているため、今後は縦断的に研究していくことが必要であろう。また、子どもの学業領域と同様に、研究対象が幼児・児童期に集中しているため、青年期以降についてもさらに調べていく必要がある。

(3) 子どもの自己知覚

子どもが自分自身をどのように認識しているのかという問題が、親の信念との関連から調べられ

ている。例えば、Frome & Eccles (1998) の研究では、小学6年生の父母に我が子の英数能力についての知覚を調べ、その約半年後に、自分自身の英数能力に対する子どもの自己知覚を調べた結果、父親母親ともに、親の知覚が子どもの英数能力の自己知覚に強く影響していることが明らかにされた。さらに、その親の信念の影響は、子どもの実際の英数成績が子どもの自己知覚に与える影響よりも強いものであった。また、親の信念が子どもの過去の英数成績と子どもの自己知覚とを媒介している（子どもの過去の成績→親の信念→子どもの自己知覚）ことも明らかにされた。

アメリカのヘッド・スタート・プログラムに参加している子どもを対象とした研究では、アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系、ヨーロッパ系アメリカ人それぞれの親の信念が調べられた (Galper, Wigfiele, & Seefeldt, 1997)。幼稚園の年長児の親（主に母親）に、我が子の数・読み書き・友達関係・スポーツなどの能力についての知覚や子どもの将来の教育への期待を、一方、子どもには小学校での学業への期待や態度を調べた結果、我が子の能力に関する親の信念は、子ども自身の学校への期待や態度と関係していた。全般的に、子どもの能力に自信を抱いている親の子どもは、学校へのポジティブな期待や態度を抱いていた。さらに、このような親の信念は、親のエスニシティとは関係なく、子どものアチーブメントテスト（算数と読み）と関連していたことも明らかにされた。

青年期の子どもの自己知覚について調べた長期縦断研究も行われている (Bleeker & Jacobs, 2004)。この研究では、12～13歳の子ども（7学年）の母親に、我が子の数的能力に関わる職業での成功についての信念を調べ、そして4年後（16歳時）に自分自身の数的能力に対する子どもの自己知覚を調べた結果、親の信念と4年後の子どもの自己知覚が関係しており、子どもの数的職業への成功を高く予測している親の子どもは、4年後の数的能力に対する自己知覚がよりポジティブであったことが明らかにされた。また、この子どもの数

的能力の自己知覚が媒介となって、さらに4年後（20歳時）の子どもの数的職業や理系職業へのセルフ・エフィカシーにも影響していたことが明らかにされた。

同じように、Jacobs (1991) の研究でも、子どもの自己知覚の媒介的役割が認められている。この研究では、小学6～11年生の父母に自分の子どもの数的能力に対する信念が、子どもには自分の数学能力に対する自己知覚や実際の数学の学業成績が調べられた。パス解析の結果、父母いずれの場合も、親の信念が子どもの自己知覚に影響し、ひいてはそれが実際の子どもの数学成績に影響していることが明らかとされた。

Aunola, et al. (2003) によれば、他の研究においても、同様に、親の信念が子どもの学業関連の自己知覚と関連していることが認められており (Parsons, Adler, & Kaczala, 1982; Phillips, 1987, Stevens & Newman, 1986; Wagner & Phillips, 1992)、ひいてはそれが子どもの学業と関係している (Pajares & Graham, 1999; Pajares & Kranzler, 1995) ことが認められたという。特に子どもの数的能力に関して、親の信念と子どもの自己知覚との関連性は広く認められており、また、子どもの学業関連の自己知覚は子どもの実際の学業成績よりも親の信念によってより強く影響されることも示されている (Frome & Eccles, 1998)。これら一連の研究知見は、親は「expectancy socializers」として子どもが現実についての解釈を行う際の一つの大きな影響力となるとする Eccles (1983) の仮説を支持するものであり、子どもがどのように現実を解釈するかに如何に親が強く影響しているかを示唆している (Frome & Eccles, 1998)。今後は、子どもの学業領域以外にも、親の信念と子どもの自己知覚や自己像との関連性が認められるのかどうか、さらに検討していく必要があるだろう。

(4) 子どものヘルス行動

近年、親の信念研究の領域では、子どものヘルス行動（手洗い行動やダイエットや栄養など）と

親の信念との関連性についても関心が高まっている。親の信念が子どものヘルス行動を促すようなしつけ行動を導くことより、子どもの健康に果たす親の信念の役割の重要性が認識されるようになっている (Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2002)。

例えば、Lees & Tinsley (2000) の研究では、幼稚園児と小学1年生の母親に、子どもの発達メカニズムについての信念や母子相互作用場面での母親の行動が調べられ、また同時期に、教師による子どものヘルス行動が評定された。結果、子どもの発達メカニズムとして「学習」や「認知発達」を重視する母親の信念が、母親のポジティブな感情や子どもへの指示的行動と関連しており、さらにこれらが子どものヘルス行動の高さと関連していたことが明らかにされた。

とはいえ、親の信念との関連性からみた子どものヘルス行動の研究はこれから始まったばかりの段階にあり、今後の研究が待たれるところである。

(5) まとめ

その他にも、子どもの帰結として12年後の青年の職業選択について取り上げた興味深い研究や (Bleeker & Jacobs, 2004)、親の信念と子どもの帰結との結びつきのあり方が文化によって異なることを明らかにした文化的研究も行われている (McGillicuddy-DeLisi & Subramanian, 1994)。さらに、近年は、親としての自己に関する信念、とくに親としてのセルフ・エフィカシー信念への注目が高まっており、子どもの発達の帰結との関連から検討されている (Sigel & McGillicuddy-DeLis, 2002)。

このように、親の信念と子どもの帰結との関連性に関して、これまで非常に数多くの研究が行われてきた。子どもの帰結としては、特に子どもの学業（主に算数や読み）や知的発達に焦点が当てられており、控え目ながらも子どもの社会的発達や自己知覚についても調べられてきた。また、最近の新たな動向として、子どものヘルス行動や親のエフィカシー信念に関する研究も急増している。そして、当初は、親→子どもという一方向的なモ

デルが暗黙的に前提とされてきたが、次第に子ども側の要因（子どもの発達レベルや行動特徴）も考慮に入れられるようになり、両者間の関連性について縦断的手法を用いて研究する動きも高まっている。

こうした一連の研究結果より、親の信念が子どもの全般的な発達側面にわたって影響していることが明らかにされてきた。しかしながら、親の信念による子どもへの影響はあくまでも（これまで主な研究対象とされてきた）児童期頃までに限って認められるものである可能性についても考慮しておかなければならない。

3. 理論的パースペクティブ

これまで数多くの研究によって、親の信念と子どもの帰結との関連性が実証されてきた。それでは、なぜこのように親の信念が子どもの発達に影響するのだろうか。どのようにして親の信念が子どもの行動パターンや内的なスキーマに取り入れられるのだろうか。この問いに対して、Murphey (1992) は、以下のような説明をいくつか挙げている。

まず一つ目に、社会心理学領域で提出された自己充足予言の理論である。自己充足予言とは、人の予想や期待が、それに見合った行動を生み出し、結果的に予想された事態を実現させてしまう現象のことである。このような効果が、親子関係を含めた人間関係にも生じるものと考えられている。すなわち、子どもにこのようになって欲しい、子どもはこのようになるものだという親の期待や予想が、（期待や予想に基づいた）子どもへの行動や働きかけを通して、結果的に実現されてしまうという考え方である。例えば、教師が生徒に高い期待を持つと、実際に生徒の成績が伸びるというピグマリオン効果もそのような現象の一つといえるだろう。

2つ目に、期待の内在化についての Saarni (1985) の理論が挙げられている。彼によれば、外的な親の期待が子どもに内在化されるかどうかは子どもの発達レベルに依存するという。まず子

どもは何らかのかたちで親の期待（それは必ずしも言語的、意図的に伝達されるわけではない）を知覚する。そして、知覚された親からのメッセージや示唆が信頼でき妥当で尚かつ有用であると見なされれば、それが子どものスキーマに取り入れられ機能するようになるという。すなわち、子どもが親の期待を知覚しその有用性を判断できる一定の認知レベルに達するようになると、親の期待が選択的に内在化されていくという考え方である。

もう一つの内在化プロセスの理論として、ヴィゴツキーの「発達最近接領域」の考えが挙げられている。例えば、ある課題が子どもにとって困難であると親が判断すれば、親は積極的にサポートをしたり、励ましを与えたりするかもしれない。それが、ひいては、子ども独自の課題達成につながる可能性もある。このように、親の捉え方や受け止め方が、子どもとの相互作用を通して、子どもの最近接領域を刺激し発達を促していると考えられる。

また、より単純には、親の信念が子どもを取り巻く環境を調整しているという説明が挙げられる。親はさまざまな信念に基づいて、子どもを取り巻く空間や物質、人間関係などを組織化し、それがひいては子どもの行動や心理的特徴の発現可能性を決定するものと推測される。

最後に、親子関係を媒介する内的な心理プロセスとしてアタッチメント理論が挙げられている。幼少期の人間関係に基づいて形成される自他に関する親の概念は、内的作業モデルとして機能する。そのようなモデルが、ひいては子ども自身の自他についてのスキーマや人間関係への期待に影響を及ぼすと考えられる。

このように、親の信念が子どもに内在化されることの説明として、Murphey（1992）は以上のような説明を挙げている。これらの説明は、親の信念による子どもへの影響を考察する際に、非常に有益な示唆を与えてくれるだろう。しかしながら、これだけで親の信念による子どもの発達への影響のメカニズムの全容を解明できるわけではない。これまで、親の信念研究では、親の信念が子

どもの発達に影響を及ぼすことのメカニズムについては、ほとんど検討されてこなかった。そのため、（研究の数の割には）この領域からの独自の理論的説明や理論的モデルがほとんど発展してこなかった。なぜ、どのようにして親の信念が子どもの発達に影響を与えるのか、そのメカニズムを解明していくことが、この領域で最も求められている課題の一つであろう。

4. 課題と展望

1980年代より盛んに行われてきた親の信念研究は、実に多様な問題意識や観点から行われてきた。そのなかでも、親の信念と子どもの帰結との関連性の問題に関しては、親の信念が子どもの全般的な発達側面にわたって影響するということが、過去20年以上にわたる研究により明らかにされてきた。とはいえ、この領域における研究には、まだまだ課題も多く残されている。

例えば、親の信念研究の多くが幼児期や児童期の子どものみに集中していることである。親の信念の子どもへの影響は子どもが比較的幼いうちは認められるかもしれないが、青年期以降になるとその影響のあり方に变化するかもしれない。とくに青年期では、子どもの認知能力の発達とともに、子どもが親の信念をどのように知覚しているのかということが問題になってくるように思われる。そして、ひいては、そのことが子ども自身の行動や心理的特徴への帰結に影響してくる可能性も考えられる。青年期において親の信念が果たす役割については、今後さらに検討していく必要があろう。

また、子どもの帰結として、子どもの学業や知的発達に関するものに圧倒的に集中している傾向がある。もちろん、子どもの社会的発達やヘルス行動や自己知覚など多様な側面についても検討されているが、それらの場合、子どもの学業や知的領域に関するほど知見が積み上げられているわけではない。もしかすると、知的な学業領域とそれ以外の領域では、親の信念が異なるかたちで子どもに機能している可能性も考えられる。知的領域以外にも、親の信念が子どもの発達にどのよう

な役割を果たしているのか、より詳細に明らかにしていくことが必要であろう。

なお当然のことながら、その際は、子ども側の要因についても十分に注意を払わなければならない。近年、親の信念研究の領域でも、親→子という一方向的な因果関係を想定してきた研究モデルへの見直しが高まり、子ども側の要因についても注意が払われるようになってきた (Aunola, et. al., 2002; 2003)。とはいえ、実際に子どもからの親への影響を実証した研究はまだまだ少なく、子どもの行動特徴や発達レベルがどのように親の信念の形成に影響するのか、できるだけ縦断的手法を用いながら、積極的に解明していく必要がある。

また、親の信念研究では、一般的な子どもについての信念と自分の子どもについての信念との区別が明白にされないまま検討されている傾向がある。おそらく、一般的な子どもか自分の子どもかによって、親の信念の内容も異なってくるであろう。さらに、子どもの帰結への影響の仕方にも違いが認められるかもしれない。今後は、対象となる子ども（一般的な子どもか、我が子か）を十分に考慮したうえで、親の信念を調べていく必要がある。

なおその際、親の信念の測定は、そのほとんどが質問紙に依存しているという現状があげられる。質問紙で測定する親の信念は、果たして本当に親にとって重要で意味ある信念なのだろうか。質問紙だけで、親が日常的に抱いている子どもへの信念を捉えることができるのだろうか。親の信念へのより豊かなアプローチとしては、インタビューによる質的なデータの収集も必要なものと思われる。

そして、この領域における最も大きな課題は、親の信念とは何かという問題である。多くの研究では、「信念」についての明確な定義がなされないまま、研究が行われている。親が子どもに対して抱いている考えであれば、何でもすべて「信念」とラベルされており、「知覚」や「期待」、「態度」、「帰属」といった類似用語との明確な区別もなさ

れていない。このような定義の不明確さや曖昧さが、研究の数だけは膨大にあるにも関わらず、これらの研究知見を統べる包括的な理論がなかなか構築されにくい理由の一つだと思われる。近年、「信念」への理論的アプローチとして、システム理論の視点から「a dynamic belief systems model」が提唱されているが (Sigel & McGillicuddy-DeLisi, 2002)、このような親の信念研究への理論的アプローチは、まだまだこれから始まったばかりの段階である。実証研究のみならず、親の信念についての理論的構築への取り組みが、親の信念研究により豊かな実りと発展もたらしてくれるものと思われる。

文献

- Aunola, K., Nurmi, J., Lerkkanen, M., & Rasku-
Puttonen, H. 2003 The roles of achievement-
related behaviours and parental beliefs in
children's mathematical performance. *Edu-
cational Psychology*, **23**, 403-421.
- Aunola, K., Nurmi, J., Niemi, P., Lerkkanen,
M., & Rasku-Puttonen, H. 2003 Developmen-
tal dynamics of achievement strategies, read-
ing performance, and parental beliefs. *Read-
ing Research Quarterly*, **37**, 310-327.
- Bleeker, M. M. & Jacobs, J. E. 2004 Achievement
in math and science: Do mothers' beliefs 12
years later? *Journal of educational psycholo-
gy*, **96**, 97-109.
- Brody, G. H., Flor, D. L., & Gibson, N. M. 1999
Linking maternal efficacy beliefs, develop-
mental goals, parenting practices, and child
competence in rural single-parent African
American families. *Child development*, **70**,
1197-1208
- Frome, P. M. & Eccles, J. S. 1998 Parents' influ-
ence on children' s achievement-related per-
ceptions. *Journal of personality and social
psychology*, **74**, 435-452.
- Galper, A., Wigfield, A., & Seefeldt, C. 1997

- Head Start parents' beliefs about their children's abilities, task values, and performances on different activities. *Child development*, **68**, 897-907.
- Halle, T. G., Kurtz-Costes, & Mahoney, J. L. 1997 Family influences on school achievement in low-income, African-American children. *Journal of educational psychology*, **89**, 527-537.
- Hinshaw, S. P., Zupan, B. A., Simmel, C., Nigg, J. T., & Melnick, S. 1997 Peer status in boys with and without attention-deficit hyperactivity disorder: predictions from overt and covert antisocial behavior, social isolation, and authoritative parenting beliefs. *Child development*, **68**, 880-896.
- Hirsjarvi, S. & Perala-Littunen, S. 2001 Parental beliefs and their role in child-rearing. *European journal of psychology of education*, **16**, 87-116.
- Jacobs, J. E. 1991 Influences of gender stereotypes on parent and child mathematics attitudes. *Journal of educational psychology*, **83**, 518-527.
- Lees, N. B. & Tinsley, B. 2000 Maternal socialization of children's preventive health behavior: The role of maternal affect and teaching strategies. *Merrill-Palmer Quarterly*, **46**, 632-635.
- McGillicuddy-DeLisi, A.V. 1985 The relationship between parental beliefs and children's cognitive level. In I. E. Sigel. (Ed.), *Parental belief systems*, Pp.7-24. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- McGillicuddy-DeLisi, A. V. 1992 Parents' beliefs and children's personal-social development. In I. E. Sigel, A. V. McGillicuddy-DeLisi, & J. J. Goodnow. (Eds.), *Parental belief systems*. Pp.115-142. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- McGillicuddy-DeLisi, A. V. & Sigel, I. E. 1995 Parental beliefs. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting, Vol. 3: Status and social conditions of parenting*, Pp. 333-358. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- McGillicuddy-DeLisi, A.V. & Subramanian, S. 1994 Tanzanian and United States mothers' beliefs about parents' and teachers' roles in children's knowledge acquisition. *International journal of behavioral development*, **17**, 209-237.
- Miller, S. A. 1986 Parents' beliefs about their children's cognitive abilities. *Developmental psychology*, **22**, 276-284.
- Miller, S.A. 1988 Parents' beliefs about children's cognitive development. *Child Development*, **59**, 259-285.
- Miller, S. A., Manhal, M. & Mee, L. L. 1991 Parental beliefs, parental accuracy, and children's cognitive performance: a search for causal relations. *Developmental psychology*, **27**, 267-276
- Murphey, D. A. 1992 Constructing the child: relation between parents' beliefs and child outcomes. *Developmental review*, **12**, 199-322.
- Okagaki, L & Divecha, D. J. 1993 Development of parental beliefs. In T. Luster & L. Okagaki. (Eds.), *Parenting: An ecological perspective*, Pp. 35-67. Hillsdale, NJ, England: Erlbaum.
- Sameroff, A. & Feil, L.A. 1985 Parental concepts of development. In I. E. Sigel. (Ed), *Parental belief systems*, Pp.83-105. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Sameroff, A. J., Seifer, R., Barocas, R., Zax, M., & Greenspan, S. 1987 Intelligence quotient scores of 4-year-old children: Social environmental risk factors. *Pediatrics*, **79**, 343-350.
- Sigel, I. E & McGillicuddy-DeLisi, A. V. 2002 Parent beliefs are cognitions: The dynamic belief systems model. In M. H. Bornstein. (Ed.), *Handbook of parenting, Vol. 3: Being*

and becoming a parent (2nd ed.), Pp. 485-508.

Mahwah, NJ: Erlbaum.

Stoiber, K. C. & Houghton, T. G. 1993 The relationship of adolescent mother's expectations,

knowledge, and beliefs to their young children's coping behavior. *Infant mental health journal*, **14**, 61-79.

(修士課程)